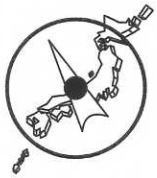
■2015年（平成27年）12月4日　内外教育　第3種郵便物認可

「笑い」でコミュニケーション力育成

●漫才師ら講師に招き―大阪府立金岡高校



笑いのプロである漫才師らを講師に招き、楽しみながらコミュニケーション能力や表現力などの向上を目指す「笑育（わらいく）」の取り組みが、今春から大阪府立金岡高等学校（堺市、和栗隆史校長）で始まった。「総合的な学習の時間」を活用した週1回の正規の授業で、コミュニケーション能力のほか、批判的思考力、問題解決力、創造力の向上を目指す。今年度以降の入学生は、全員、1、2年生で履修する。

クラスづくりに思わぬ効果

9月中旬に行われた2学期の1回目の授業。1年生の全9クラス、約360人の生徒が講堂に集まると、漫才コンビのトライアングルと、お笑い芸人のやのぱんさんが登場した。トライアングルの森直樹さんが、「1学期は漫才を体験した。2学期は中身を掘り下げ、コミュニケーション能力を高めていく」と授業の目標を紹介し、コンビを組む田中匡さんと、短い漫才を披露した。

やのぱんさんらは、「褒める人」「褒められる人」の2人が向かい合って、褒める人が褒められる人を5秒間観察して、10秒間褒めるという「ホメリング講座」や、名詞と形容詞が書いてあるカードを1枚ずつ引いて、そのカードにつっこむ「ツッコミ1000本ノック」などをやってみせた。これらは、2学期中にクラスごとに全員がやってみる漫才づくりのためのメソッド（方法）の一部だ。

ツッコミ1000本ノックに挑戦する岡部君（右端）

このツッコミ1000本ノックに、生徒の中から希望者が挑戦。岡部望君は、「頼りない」「ちょんまげ」のカードに「すぐ、崩れる」、「新しい」「フィギュアスケート」のカードに「すべらない」などと瞬時に見事なツッコミを入れ、他の生徒や教諭らを感心させていた。この成功に気を良くしたのか、岡部君は「生徒会長に立候補したので、よろしくお願いします」と、ちゃっかり〝選挙運動〟。さらに笑いを誘っていた。

2学期は、各生徒がこのツッコミ1000本ノックや、よくある日常の会話を微妙にずらして笑いを生む「ズラッシング法」など、さまざまな方法を用いながら、漫才を作っていく。12月18日の2学期最後の授業では、「ミニ漫才クラスマッチ」として、大会形式でクラス代表が1年生全員の前で漫才を披露する予定だ。

笑育には他校も注目している。見学した府立阪南高校（大阪市）の露口玉緒教諭は、笑育について、「生徒が前向きに取り組んでいた。阪南高校は国際交流に力を入れる一方で、寝ている生徒がいる授業もある。笑いを採り入れることで、生徒がのってくるのではないか。これからも勉強させてほしい」と、感心していた。

金岡高校の取り組みは、芸能事務所の松竹芸能（井上貴弘社長）が府内の小学校や中学校などで行っていた「笑育」の出前授業に、元放送作家で民間出身の和栗校長が注目して実現した。年間を通した笑育はこれまでになく長期間のもので、カリキュラム作りには、大阪成蹊大学教育学部の福岡亮治専任講師らの協力を得ている。今年は、1学期の成果を見ながら2学期の予定を組んでいくなど、「走りながら」のカリキュラム作成となった。

1学期は、ネタの発見や情報の収集、編集など

■2015年（平成27年）12月4日　内外教育　第3種郵便物認可

を通じて笑いの仕組みについて学び、これまでの自分を見直す「自分史漫才」を作った。若手漫才師や担任教諭らの指導で、1年生全員が2人1組で、自分や友達の人生を素材にした漫才を作る内容だ。

この1学期の授業は、本来の笑育の目的に加え、どの学校も頭を悩ませる新入生のクラスづくりにも効果があったという。これは、漫才を作る過程で、それまでの人生の良い時期、悪い時期を示すアップダウンのグラフを作製して、それを材料に「漫才もどきのもの」（和栗校長）を作って発表した。この時、弱みを含めてクラスで自分をさらけ出したことで、教諭も含めたクラスの人間関係が「ぎゅっと近くなった」（同）という。

講師役のお笑い芸人（前列右から3～5人目）と記念撮影する金岡高校の1年生ら

和栗校長は「新入生は、人間関係づくりに手間と時間がかかるのに、あっという間に友達になっちゃった。弱みをさらけ出したら、怖いものはない。子どもたちはそれをいじめの材料にすることもなく、『大変だったねえ』って、フォローし合うようになった。そんな副産物があった」と思わぬ効果に顔をほころばせている。

課題はメソッド

一方で、課題も浮かび上がってきた。「自分史を振り返って漫才を作る」という仕掛けはしたが、「どうしたら自分史が漫才になったのかというメソッドがなかった」という。和栗校長は「センスでできた生徒もいたが、分からなかった生徒もいたと思う。笑育に限らず、英語でも数学でも理科でも社会でも、具体的なメソッドでスキルを子どもたちに伝えるのが教育の仕事」と話す。

従って、たまたま、センスに頼って漫才を作るのではなく、自分史などの材料をどうやって、漫才のネタにしていくかを教えることが必要という。このメソッド開発が、今後の課題だ。このため、2学期に予定していた「川柳を作ってそれを漫才にする」という授業の内容を変更し、福岡専任講師らがメソッドを開発、そのメソッドを活用した漫才をそれぞれの生徒が制作することになった。

もちろん、笑育はお笑い芸人の養成が目的ではない。福岡専任講師は「芸人のコミュニケーションスキルやプレゼンテーション能力などを子どもたちに伝えることが、一つポイント」と話す。ネタ作りをする芸人のスキルを分析していくと、「それらが情報収集能力や情報整理能力、論理的思考力など、いわゆる『21世紀型スキル』に集約できた。そこを目標にしようかというところでやっているのが、現在の笑育の形になっている」という。笑いを手掛かりに、多様な能力の開発をもくろんでいる。

そこで福岡専任講師は、お笑いコンビのアメリカザリガニや、トリオの安田大サーカスら、松竹芸能所属の10組以上にインタビュー。お笑いのネタの作り方は、才能やセンスで作るものと努力で作るものがあるといい、このうち、努力を積み上げて作っている部分を丹念に聞き取った。それらを、「ツッコミ1000本ノック」などにメソッド化して、生徒らのネタ作りに役立てる。

同校の生徒らは、今後、2年生の最後まで、笑育に取り組むことになる。「漫才作りは、ツールにすぎない」と福岡専任講師は語る。楽しみながら学んでもらうことで、まずは、学校が楽しくなり、次いで、話すだけではなく、聞くことや雰囲気作りの重要性にも気付いてほしいという。

福岡専任講師は「話を聞く時には、笑顔でうなずくことも大事。自分が主張をするときも、怒ってではなくて、和やかなムードでしゃべる方が穏便に話が進む」と指摘。「笑育で得たものが、プレゼンテーションや就職活動の面接で力となり、円満な人間関係づくりや、やりたいことの実現につながる。2年間の学びを通じて、笑いによって人を幸せにできるということを、つかみ取ってもらいたい」と願っている。　（小沢一郎＝大阪支社）